

事象構造メタファーにおける「波」と「流れ」の移動 —社会的活動の概念化をめぐる—

Movement of "Nami" and "Nagare" in Event Structure Metaphor:
On the Conceptualization of Social Activities

松浦 光[†], 三田 寛真^{††}, 朱 薇娜^{†††}
Hikaru Matsuura[†], Hiromasa Mita^{††}, Weina Zhu^{†††}

Abstract The study examines metaphoric expressions describing social activities in terms of the motion of water using the Event Structure Metaphor and Frame Semantics perspectives. First, we proposed two sub-types of manner of motion within the Motion Frame: animal-like motion and vehicle-like motion, and these characterize the semantics of *nami* ("wave") and *nagare* ("flow"), respectively. Second, we demonstrated that this distinction in the manner of motion can be understood as exhibiting different readings of the two words, both literally and metaphorically in actual contexts, where they occur in relation with verbs of motion signifying a Force-Dynamic relationship between the moving object and the perceiver in a motion event.

1. はじめに

日本語では、「世間の {波/流れ}」「再編の {波/流れ}」のように、何らかの変化を伴う社会的活動などを、「波」や「流れ」といった液体の移動としてごく自然に表現することができる。認知言語学では、このようなメタファー的表現を支えているものとして、概念メタファー¹の働きを想定する。

概念メタファー理論では、変化や行為などの事象が、空間的な移動に関連した複合領域を元フレームとして概念化されることがあるとされ、Lakoff(1993)はこれを事象構造メタファー(Event Structure Metaphor)と呼んでいる。鍋島(2011:173-184)は、日本語における事象構造メタファーを<<活動は移動>>²としてまとめ、その中に<外部事象←大きな移動物>³という部分構造を認めている。この写像関係があるからこそ、活動の外的要因を「波」「流れ」「風」などの自然環境的実体として捉えることが可能となり、例えば「{波/流れ}に乗る」「流れに逆らう」「追い風を受ける」などの表現が産出されると指摘している。

ここで注目したいのは、移動する実体としての液体(水)である。液体という形態は、これまでに様々なメタファー的概念化の元フレームに関与することが確認されてきた(野村 2002; 大石 2006)。山梨(2000)が論じているよ

うに、事物や状態に対する人間の捉え方には、可算的な<複数個体>スキーマ的なものと不可算的な<連続体>スキーマ的なものがある。液体は、その後者の把握様式に関与するものとして重要な位置にあるといえよう。その中で「波」や「流れ」は、実体としても語彙としても、典型的な水の移動現象である⁴。

従来、事象構造メタファーの研究という大きな文脈においては、「波」と「流れ」は類似概念としてまとめられ、それらの詳細が特段に検討されたことはなかった。たしかに前述の「{波/流れ}に乗る」など、多くの場合、特に差がないようにみえる。しかしながら、次のような例をみると、両者のメタファー的な振る舞いには細かな違いがあることが分かる⁵。

- (1) a. 周囲の {??波/流れ} に乗って、自己紹介する。
b. 業界再編の {波/??流れ} が襲う。

(1a)のように、「周囲の流れに乗って、自己紹介する」は自然だが、「周囲の波に乗って、自己紹介する」というのは容認しづらい。一方で(1b)のように、「業界再編の波が襲う」は自然だが、「業界再編の流れが襲う」とは表現しにくい。「波」も「流れ」も、事象構造メタファーに参加しうる液体の移動という点では共通するが、メタファー的意味合いには違いが生じてくることが確認できる。

そこで、本稿では、主に「名詞+の+ {波/流れ}」の形

[†] 横浜国立大学 国際戦略推進機構 (横浜市)

^{††} 東京大学大学院 総合文化研究科(東京都目黒区)

^{†††} 愛知工業大学 基礎教育センター (豊田市)

式に注目し、具象的な液体移動を通して人間の社会的活動を理解するメタファー表現の成立メカニズムを考察する。どのようなものが「波」として、どのようなものが「流れ」として表現されやすいかを用例⁶に基づき明らかにする。その際に、移動という事象概念には下位分類として<“動物”的移動>と<“乗り物”的移動>とがあり、それぞれが1つのフレームとして「波」と「流れ」の意味を規定することを指摘する。この違いが、反復性／一方向性、コントロールの不可／可、内部構造の無し／有り、という具体的な意味特徴の違いとして現れ、様々な実例の解釈を決める。本稿を通じて、「波」と「流れ」は、一見、事象構造メタファーに同じように関与するが、実は移動の種類の違いによって、異なる意味拡張が動機づけられていることを主張する。

2. 移動体としての「波」と「流れ」

本節では、物理的な意味で用いられる「波」と「流れ」を観察する。本稿では、意味知識を説明するものとしてフレームの考え方をを用いる。フレームは構成要素によって構造化される概念的知識で、メタファー表現の分析においても説明概念として使われてきた(Sullivan 2013; 松浦 2017)。それらの研究では、フレーム間のメタファー写像を、フレーム要素間の対応として詳述する方法がとられている。

特に、液体の移動については、松浦(2018)で、一方向性を持つ液体の移動として「川」の「流れ」の例を中心に取り上げられており、「流れ」を規定するフレームには「進行方向」が関与することが指摘されている。まずは「進行方向」という観点から、「波」と共に、改めてその表現化を考察したい。(2)、(3)は、物理的な意味で用いられる「波」と「流れ」の移動の例である。

- (2) 寄せては返す波の動きを見つめたり、足にかかる力を感じることが楽しかったのだろう。(BCCWJ: 加藤浩美『たったひとつのたからもの』)
- (3) 琵琶湖からの流れを一筆書きにたどると 12 回も名前を変えるルートがある。瀬田川→宇治川→淀川→大川と来て、土佐堀川から南に分岐する東横堀川は西に曲がると道頓堀川になり、木津川を横断して下ると、岩崎運河、尻無川などを経て大阪湾に注ぐ。(日本経済新聞 2016/9/10)

(2)では、ある特定の地点からみて、「波」が近づいたり遠のいたりするさまが「寄せては返す」と表現されている。(3)は、琵琶湖(上流)から大阪湾(下流)への一方の「川」の「流れ」を描く内容である。「波」は、空間的な遠近や上下の動きを繰り返すという意味での「反復性」

が想定される。それに対し「流れ」は、川の上流から下流、水源から海など、起点から着点への「一方向性」が前提にある。

- (4) a. {波/流れ}が続く。
b. 点Aから点Bまでの{*波/流れ}。

(4a)における「続く」の通常解釈を考えると、「波が続く」は波が押し寄せる回数を示すのに対して、「流れが続く」は地理的な伸長を示す。また、(4b)のように、カラ句とマデ句で修飾できるのは「流れ」だけである。「波」は「津波」のようなものを除けば、現れてはすぐに消えるのを繰り返し、一回一回の始点や着点は把握されにくいともいえる。これら「波」と「流れ」の表現上の相異は、やはり移動の「反復性」と「一方向性」によるものと整理できる。

次に、「波」と「流れ」をコントロール性の有無からみるため、(5)の例に注目する。

- (5) a. {??波/流れ}を弱める。
b. {??波/流れ}を緩める。

両例とも「流れ」に比して「波」の方の容認度が下がる。つまり「波」は「弱める」「緩める」のような意図的な変化動詞の目的語になりにくい。「波」と「流れ」はどちらも自然環境に生じる液体の移動であるが、前者はコントロールが不可、後者はそれが可能なものとして把握されていることを示唆する。

さらに、「波」と「流れ」がどのような形状を持つ実体として捉えられているかについても、(6)から検討したい。

- (6) a. {*波/流れ}に入る。
b. 周囲の{*波/流れ}。

「に入る」「周囲の」という表現は、外側に対する内側があることを前提とする。ゆえに、それらと共に起できない「波」には内部構造が想定されておらず、共に起できる「流れ」には内部構造が想定されていると解釈できる。物理的には、一つの波が起きた際にその中に入り、水に囲まれることもあるかもしれないが、意味知識のレベルではそのような内部は想定されていない。

以上の本節の分析を整理する。「波」と「流れ」はどちらも自然環境における液体の移動体あるいは移動現象である。しかし、両者の詳細な比較から、意味概念としての「波」は反復性、コントロール不可、内部構造の不在という特徴を持つのに対し、「流れ」は一方向性、コントロール可能、内部構造があるという特性が想定されていることが分かった。これらを統合的に捉えると、<移動>の中で、「波」は<“動物”的移動>を、「流れ」は<“乗り

事象構造メタファーにおける「波」と「流れ」の移動
—社会的活動の概念化をめぐる—

物”的移動>を、それぞれ構造化されたフレームとして背景に持つと見なすことができる。それを示したのが、表1である。

表1 “動物”的移動と“乗り物”的移動

特徴	移動フレーム	
	“動物”的移動フレーム	“乗り物”的移動フレーム
移動	反復性	一方向性
コントロール	不可	可
内部構造	無し	有り

「波」は、いわば野生動物のごとく、どこまで行くか読めず操ることのできない移動を生じるものとして、「流れ」は、車や飛行機のように、目的地が明白で、乗り込んで操縦可能な移動を生じるものとして、理解されている。このフレーム区分は単なる説明の便宜ではなく、以下でも見るように、「波」「流れ」を使った表現を動機づける、概念化者の知識である。

3. 「波」と「流れ」における力動性

前節で提案した二種類の移動フレームを踏まえて、本節では、さらに「波」と「流れ」が、他の場面参与者（典型的には知覚者である「人間」）とどのように関係し、それによってどのような表現が生まれるかを確かめる。その際に援用したいのが Talmy(1985, 2000)における力動性 (Force Dynamics)の考え方である。力動性とは、物体の力学的相互作用について我々が持つ素朴な(naïve)知識が、言語の意味構造にまで浸透していることを捉えるための概念といえる。物体は、他の物体と共に移動したり、それによって妨げられたり、互いに反発したりと、様々な形で力学的な影響を及ぼしあう。このとき、第一の参与者を主動体(Agonist)と呼び、それに働きかけるもう一方の参与者を対抗体(Antagonist)と呼ぶ。

この力動性の概念を援用し、本稿では特に、二つの参与者が同方向に移動する場合を共動、移動しようとする方向が一致しない場合を拮抗と呼ぶ。問題の液体の移動事象においても、知覚者として参与する「人間」が、「波」や「流れ」との間で共動、拮抗の関係を結ぶ。その関係が、「波」や「流れ」を用いた様々な動詞構文の意味理解を支え、さらにメタファー表現の広がりも動機づける。ここでは、(7)、(8)のように物理的な意味で用いられる例でその関係を確認しておく。

- (7) a. (人が) {波/流れ} に乗る。
b. (人が) {波/流れ} に逆らう。
(8) 真っ暗闇でも海からごつくて白い波が押し寄せてくるのが、はっきりとわかった。人の胸ぐらいの高

さの波が次々と襲った。(読売新聞 2016/12/14)

(7)は、「波」「流れ」と「人」の共動や拮抗を、ごく単純な表現で言語化したものである。人間を中心として、感覚を持った知覚者が主動体であり、「波」と「流れ」は対抗体として働きかける。このとき、「乗る」「逆らう」という動詞自体は必ずしも移動動詞ではないにも関わらず、(7)では海や川の中での位置変化が含意されることに注目したい。「波」「流れ」は移動フレームを背景に持つからこそ、力動的な共動が<同じ方向に進もうとする>ことを意味し、力動的な拮抗が<反対に進もうとする>ことを意味するのである。

また、移動の勢いや規模が強すぎるような状況では、力動的な拮抗による物理的な影響が、敵対関係や被害関係として理解されることもある。(8)では、高く勢いのある波が「押し寄せる」と表現されるような移動事象の描写において、「襲った」という、敵対や被害と結びつく他動詞が用いられている。ここでも「襲う」が半ば移動動詞として理解されるのは移動フレームによるものである。傾向としては、「流れ」より「波」の方がこうした敵対的場面に出やすいが、それは「波」が背景とする“動物”的移動が、何度も生じ、制御や予測ができない特質を持つからであろう。

なお、フレームの観点から整理すると、共動と拮抗という関係とは、フレームの要素項である<液体>と<知覚者>の間にあり得る相互作用のパターンを指すといえるだろう。

4. 「波」と「流れ」のメタファー表現の考察

本節では、今までの考察を踏まえて、人間の社会的活動を目標領域として「波」と「流れ」がメタファー的に用いられるしくみを、実際の用例をもとに考察する。本稿は「名詞+の+{波/流れ}」に注目する。名詞修飾構造は、修飾部を目標領域、被修飾部を起点領域として結ぶ、最も単純な構造の一つである(Dancygier & Sweetser 2014)。

4・1 「波」と「流れ」両方容認できるメタファー表現

まずは、「波」と「流れ」で共通のメタファー表現をみる。(9)～(11)では、「波」を「流れ」に、「流れ」を「波」に置き換えても、問題なく容認できる。

- (9) 小売店など非中核事業を切り離し、今後は高級品とスポーツ事業に経営資源を集中する。両分野でM&A（合併・買収）を積極的に進め、中間層が台頭する新興国を中心に事業を拡大。株高などを受けて先進国で再び高まるブランド購入ブームの波にも乗る。(日本経済新聞 2013/03/23)

- (10) 近ごろはやるのは、牛のバラ肉をたっぷりのタマネギとともに鉄板で焼いた「バラ焼き」だとか。B級グルメブームの流れに乗り、「70軒以上の店がある」と、「焼肉東月園」の似鳥（にたどり）義博さん。（読売新聞 2010/05/27）
- (11) 財政難や用地不足を理由に、整備に消極的な自治体もある。受け皿を拡充しなければ、少子化の流れは止まらない。政府は自治体への支援を強化する必要がある。（読売新聞 2017/06/02）

(9)、(10)では、社会現象である「ブーム」が、それぞれ「波」と「流れ」として表現されている。これは<<活動は移動>>による概念化で、「ブーム」がその移動物として捉えられている。共起する動詞「乗る」は、前節でみたように主動体と対抗体との共動を言語化しており、知覚者が液体の移動に身をゆだねるのが「{波/流れ}に乗る」である⁷。

(11)も、社会的な情勢変化である「少子化」を「流れ」で表現したものであり、「少子化の波」に置き換えても、容認度は変わらず文は成立する。ただし、両者のメタファー的意味には微妙な違いが生じる。「少子化の流れは止まらない」は、単に「少子化」が一層進むことを表す。「流れ」は“乗り物”的移動として「一方向性」を前提とするためである。一方、「少子化の波が止まらない」というと、「波」の「反復性」が働き、過去から未来にかけ程度を強弱させながら「少子化」が何度も起こるという解釈も可能となる。（その場合(12)、(13)と似たものとなる）。

4・2 「波」のみ容認できるメタファー表現

次に、「流れ」では置き換えられず、「波」のみメタファー表現として容認できる用例を確認する。(12)、(13)においては、「波」固有の“動物”的移動フレームを表現の基盤にみることができる。

- (12) もはやアメカジは日本文化。マニアが熱く語り、ブームの波も繰り返す。（日本経済新聞 2018/01/28）
- (13) 富士重はこれら2つの価値を実現する技術を基本的に単独で開発してきた。だが自動車業界には自動運転や環境技術、つながる車、人工知能（AI）といった技術変革の波が次々と押し寄せている。他社との提携戦略や、採用する技術の取捨選択といった難しい判断を迫られる段階に入っている。（日経産業新聞 2017/03/09）

(12)では「ブームの波」が「繰り返」し、(13)では「技術変革の波」が「次々」と生じると捉えられている。「波」は「反復性」を持つ移動であるため、社会現象の続発を表現できる。これらを「流れ」に置換すると不自然であ

ることを確認されたい。

また、「波」は対抗体としての力が強調されやすく、(14)～(16)のように、社会的活動による敵対や被害などの影響を含んだ表現も頻発する。

- (14) 新党「希望の党」への事実上の合流を決めた民進党の分裂が決定的となった。保守的な政策の受け入れを迫り、リベラル系を拒否する希望側の「排除の論理」に反発し、代表代行の枝野幸男（53）が新党結成に踏み切った。東京都知事の池田百合子（65）の登場で押し寄せた野党再編の波は、保守系とリベラル系が共存する「寄り合い所帯」の民進党を分断に追い込んだ。（日本経済新聞 2017/10/03）
- (15) 異次元緩和のもとで、貸し出しの増加が求められている銀行が、期待通りに動けないのはなぜか。5位に入った『ドキュメント 銀行』はバブル崩壊後、日本の銀行界が再編・淘汰の波にのまれた激動期から現在まで（1995～2015年）の動きを克明に追った。（日本経済新聞 2016/12/25）
- (16) 電力とガスの全面自由化をにらみ、地方の都市ガス会社が攻めに転じる。海外への進出、電力事業への参入……。エネルギー再編のカギを握る存在にもなってきた。地域、業界の垣根を越えて競争が激しくなれば、全国に205ある都市ガス事業者を淘汰の波が襲うのは必至。（日経産業新聞 2015/10/08）

(14)～(16)ではそれぞれ、「野党再編の波」が「追い込み」、「再編・淘汰の波」に「のまれ」、「淘汰の波」が「襲う」といった形で、社会的活動が、ある対抗的立場の者に対して強い影響を及ぼすことが捉えられている。つまり、対抗体である強い「波」が、脅威として主動体に近づき、その進行や安定を妨げるものとして把握される。

以上は、<<活動は移動>>の中でも、特に社会的活動←“動物”的移動>の概念化が関わるものとして、説明可能である。

4・3 「流れ」のみ容認できるメタファー表現

次は反対に、「波」では置き換えられず、「流れ」のみメタファー表現として容認される用例の考察を行う。(17)、(18)では、「流れ」の基盤に“乗り物”的移動フレームによる概念化をみることができる。

- (17) 大学3年になり、就職活動の時期が訪れると、ひとまず周囲の流れに乗り、食品会社などに資料を請求しました。この会社からも社員にならないかと声をかけられ、気持ちは揺れ動きました。（読売新聞 2014/06/19）
- (18) 子供の進学・教育について「世間の流れに乗り遅れないようにしている」人は六割近く、「習い事や塾

事象構造メタファーにおける「波」と「流れ」の移動
—社会的活動の概念化をめぐる—

に通わせないと不安」な人も五割超——。ベネッセが小中学生の子供がいる母親を対象に実施した「子育て生活基本調査」で、こんな結果が出た。同社は「保護者の間で教育に関する不安はますます高まっている」と分析している。(日本経済新聞 2008/03/22)

(17)では、「周囲の流れに乗る」という表現で、周囲の者と同じ行動(「就活」)をとることを示す。(18)では、「子供」が習い事や塾に通うことが「流れに乗る」こととして捉えられている。2節でみたように「流れ」は、一方向的で着点を持ち、コントロール可能なものとされる。従って、「乗る」場合には、ある目的地を想定して、主体的にそこに向かうための移動が喚起される。

また、(19)では、“乗り物”的移動としての別の側面をみることができる。

(19) 地方銀行の生き残り競争が激しさを増している。昨年11月に常陽銀行と足利ホールディングス(HD)が経営統合を決めるなど再編の流れは止まらない。成長戦略の柱としてきた大都市圏への進出に伴う低金利競争も消耗戦の様相を呈している。(日本経済新聞 2016/01/07)

ここでは、「地方銀行」にとって「再編」の動きが「一方向性」を持つ移動であると捉えられている。“乗り物”的移動としての概念化は、着点の存在が想定できるがゆえ、「止まらない」という表現によって、(数多の)「再編」の完了という着点に向けてより進むことが示唆される。

5. まとめ

本稿では、事象構造メタファーの枠組みで、社会的活動が「波」と「流れ」としてメタファー的に表現されるメカニズムを考察した。まず、「波」と「流れ」という液体の移動を捉えるにあたり、移動のフレームに“動物”的移動と“乗り物”的移動という様態の区別があることを指摘した。そして、その要素である移動物(液体)と知覚者との間の力動的な関係によって、共動と拮抗が生じることを述べた。

これらフレームの構造が、「波」と「流れ」の物理的な意味、メタファーの意味の振る舞いを動機づける。具体的には、“動物”的移動は反復的でコントロールできず、内部構造も無いという特徴によって、“乗り物”的移動は一方向的でコントロールができ、内部構造を持つという特徴によって、異なる意味解釈に影響を与えている。

本稿でみたメタファーは、<<活動は移動>>の一つとして、社会的活動が液体の移動として概念化されるものである。表2は、関与するフレームと、その要素の写像関

係を示したものである。

表2 社会的活動と液体移動の写像関係

<<活動は移動>>	
活動：先フレーム	移動：元フレーム
社会的活動	液体の移動
活動の参加者	知覚者(人間)
活動の様態	動物的/乗り物的

本稿は、社会的活動に対して、どのようなものが「波」として表現されやすいか、「流れ」として表現されやすいかの傾向を明らかにした。事象構造メタファーとして、両者は似たようなメタファー表現を生じるが、本稿は、そこに関与する移動に類型の異なりを見出し、フレーム要素が持つ特徴によって、メタファーの意味に違いが生じることを指摘した。

今後の課題として、本稿で提案した移動の類型が、他の事象構造メタファーの表現化にも適用できるかを検証する余地がある。例えば、液体ではない「風」「嵐」などに対象を広げ、人間の認知が自然現象の移動をどのように概念化しているのかを検討していく。さらに、諸言語との比較を行い、本モデルの精緻化を目指したい。

注

1)認知言語学の枠組みにおいては、語彙の背景には日常の経験が構造化された知識として、フレームが存在すると想定されている。一般に、抽象的な概念領域(先フレーム)は、より具象的な概念領域(元フレーム)からの体系的な写像関係によって理解されると考えられており、この写像関係を概念メタファーと呼んでいる。(Lakoff and Johnson 1980; Fillmore 1982; 谷口 2003; 鍋島 2011, 2016)

2)本稿における概念メタファーは、「<<AはB>>」(Aは先フレーム、Bは元フレーム)と表記する。また、概念レベルのメタファーを具現化したものを「メタファー表現」と呼ぶことにする。

3)鍋島(2011: 174-175)には、「これらが単独のメタファーなのか写像なのかは曖昧であり、個別に検証する必要がある。」とあり、「<A←B>」(Aは先フレーム、Bは元フレーム)で個々のメタファーとも写像とも解釈できるような表記がなされている。本稿では、液体の移動に関するメタファー表現の生産性の高さを踏まえて、概念レベルのメタファーとして捉える。

4)なお、「一つの{波/流れ}」と数えられるように、液体の移動を固体的にモノ化して把握することもある。

5)用例中の傍線は断りのないものは全て稿者による。実線は分析対象表現、点線は分析対象表現以外の注目すべき箇所を示す。また、用例に典拠が示されていないものは全て稿者による作例である。容認度の基準として、

NINJAL-LWP for BCCWJ(<http://nlb.ninjal.ac.jp/>) と Google(<https://www.google.co.jp/>)での検索を用いて用例の有無を確認した後、稿者による内省を行っている(2018年12月10日現在)。「*」は非文、「??」は非文ではないが、容認されにくいことを表す。

6)本稿は、「波」と「流れ」の言語使用の多寡をみるのではないため、数値の統計的比較などは行っていない。また概念メタファー理論では、概念レベルのメタファーの同定を、新奇なメタファー表現よりもまずは慣用的なメタファー表現に対して想定している。本稿もこの立場を取り、ごく一般的な言語事実を通して、その背後にある捉え方を明らかにすることを目的とする。従って、作例や慣用的で典型的な実例が考察対象となる。

7)ここでの考察は、当初「対抗体自体の働きかけ」そのものを想定していたが、表現学会の査読者の「対抗体自体の働きかけに主動体である知覚者が身をゆだねる」というコメントを援用して、記述を行った。

参考文献

- Dancygier, E. and E. Sweetser. (2014) *Figurative Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fillmore, C. (1982) "Frame Semantics." In the Linguistic Society of Korea (eds.) *Linguistics in the Morning Calm*, 111-137. Seoul: Hanshin Publishing.
- Grady, J. (1997) "Foundations of Meaning: Primary Metaphors and Primary Scenes." Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley.
- Lakoff, G. (1993) "The Contemporary Theory of Metaphor." In A. Ortony (ed.) *Metaphor and Thought*, 202-251. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳)(1986)『レトリックと人生』東京:大修館書店.)
- 松浦光(2017)「現代日本語における気象現象の概念化—概念メタファー理論によるアプローチ」名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士学位論文.
- 松浦光(2018)「現代日本語における「流れ」と事象構造メタファー」『日本語用論学会第20回大学発表論文集』13、pp. 153-160.
- 森雄一・高橋英光(編)(2013)『認知言語学 基礎から最前線へ』東京:くろしお出版.
- 鍋島弘治朗(2011)『日本語のメタファー』東京:くろしお出版.
- 鍋島弘治朗(2016)『メタファーと身体性』東京:ひつじ書房.
- 野村益寛(2002)「<液体>としての言葉: 日本語におけるコミュニケーションのメタファー化をめぐる」、大堀壽夫(編)『認知言語学Ⅱ: カテゴリー化』、37-57. 東京: 東京大学出版会.
- 大石亨(2006)「「水のメタファー」再考—コーパスを用いた概念メタファー分析の試み—」『日本認知言語学会論文集』6、277-287.
- Sullivan, K. (2013) *Frames and Constructions in Metaphoric Language*. Amsterdam: John Benjamins.
- 滝理江(2013)「ガマンズルとタエルの類義語分析—力動性の観点から—」、『日本認知言語学会論文集』13、310-322.
- Talmy, L. (1985) "Force Dynamics in Language and Thought." In *Papers from the Twenty-First Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, 293-337. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Talmy, L. (2000) *Toward a Cognitive Semantics. Vol. I.: Concept Structuring Systems*. Cambridge, Mass: MIT Press.
- 谷口一美(2003)『認知意味論の新展開—メタファーとメトニミー』東京: 研究社.
- 山梨正明(2000)『認知言語学原理』東京: くろしお出版.

用例出典

日経テレコン 21 (日本経済新聞社)
ヨミダス歴史館 (読売新聞社)
現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)

付記

本稿は、第55回 表現学会 全国大会(平成30年6月3日(日)、於 同志社大学 今出川キャンパス)における研究発表「事象構造メタファーからみた人間の活動の「波」と「流れ」を再構成し、大幅に加筆・修正をほどこしたものである。発表時・査読時に貴重なご意見を下さった皆様に感謝致します。

また、本稿の査読者から有益なご指摘を数多く賜りました。さらに、勉強会 喩楽座における議論からも多くの着想を得ました。篤く御礼申し上げます。

(受理 令和2年3月19日)